



👁️👁️ みどころ

日中韓、三国の外交問題が山積する中、韓国の「負け戦」を描いた『天命の城』（17年）は観客数が伸び悩んだが、「勝ち戦」を描いた『安市城 グレート・バトル』は大ヒット！なるほど、なるほど・・・。

太宗率いる20万の唐軍を迎え撃つ安市城の将兵は5000人。しかし、堅固な城と団結心さえあれば！！楠木正成の千早城、赤坂城、真田幸村の真田丸をはるかに圧倒する安市城の攻防は、攻城塔の第2ラウンド、土で固めた山を活用する第3ラウンドまで進んだが、その決着は・・・？

戦いにはリーダーの戦略・戦術が大切。それを考えながら、韓国発の歴史アクションの迫力をタップリ楽しみたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■韓国の「歴史モノ」大作は必見！■□■

私は歴史モノ大作が大好きだから、呉宇森（ジョン・ウー）監督の『レッドクリフ Part I（赤壁）』（08年）（『シネマ34』73頁）、『レッドクリフ Part II（赤壁 決戦天下）』（09年）（『シネマ34』79頁）や、つい最近の『キングダム』（19年）（『シネマ43』274頁）等は必見だったが、これらの「三国志もの」や「秦の始皇帝もの」はみんながよく知っている「歴史モノ」。しかし、1636年～1637年の「丙子の役」は、韓国映画『天命の城』（18年）を観てはじめて知った（『シネマ42』257頁）。それと同じように、本作を観てはじめて知ったのが、西暦645年に起きた「安市城の戦い」だ。

大国・唐の皇帝・太宗がアジア全土を支配すべく、大軍を率いて時の朝鮮半島・高句麗へと侵攻し、各地の武将たちが次々と降伏していく中、たった一人その大軍に反旗を翻し、

戦って国を守ろうと決意したのが安市城の城主・楊萬春（ヤン・マンチュン）（チョ・インソン）。本作はそんな男・楊萬春と安市城の勇敢な戦士たちの「グレート・バトル」を圧倒的スケールで描いた歴史アクション大作で、韓国では500万人の観客を動員したヒット作らしい。

ちなみに、韓国では9月22日～26日が秋夕（チュソク）の大型連休で、この時期は映画館への観客動員数が伸びるらしい。そして、2018年のチュソク連休で公開された本作は、公開8日目で観客数300万人を突破したそうだ。昨年2017年のチュソクに公開された『天命の城』は観客数が伸び悩んだが、一説によるとそれは、同作は“負け戦”を描いていたため。つまり、昨年の秋は朝鮮半島の南北の緊張が高まり、北朝鮮のみならず米国や中国、日本との間で韓国外交は悩ましい状況だった。そんな中、「現実が憂鬱なのに、映画でさらに憂鬱になりそう」と敬遠する人も多かった、わけだ。それに対して、本作は圧倒的な韓国（高句麗）の“勝ち戦”を描いたから、1761万人という韓国映画史上最多動員数を誇る『バトル・オーシャン 海上決戦』（14年）と同じように大ヒット！なるほど、なるほど・・・。

■ ■ 「三国志」ではなく、朝鮮半島の「三国時代」は？ ■ ■

陳凱歌（チェン・カイコー）監督の『空海 KU-KAI 美しき王妃の謎』（17年）は、唐の玄宗皇帝の時代で、8世紀前後のお話。西暦618年に成立した唐王朝は907年まで続いたが、安市城でグレートバトルが展開された西暦645年は、太宗皇帝の絶頂期だ。唐王朝に対して当時の日本は遣隋使に続く遣唐使を派遣し友好関係を保っていたが、さて朝鮮半島は？

中国では魏・呉・蜀が鼎立する184年頃～280年までの約100年間の時代を描いた「三国志」が有名。古代の朝鮮半島の歴史は複雑だが、古代の朝鮮半島にもそれと同じような三国時代があった。つまり、紀元前1世紀から紀元後7世紀までは、朝鮮半島と満州に百済、高句麗、新羅の三国が鼎立する「三国時代（朝鮮半島）」が続いていた。しかし、本作冒頭は、西暦645年の太宗イ・セミン（パク・ソンウン）率いる20万人の唐の大軍と高句麗軍15万の軍勢との大平原での激突だが、さて、これはホントの話？

陸軍同士が平地で激突した「会戦」としては、日露戦争で日露の陸軍が激突した奉天会戦と遼陽会戦が有名。また、『戦争と平和』で描かれたナポレオンとロシアの戦いではアウステルリッツ会戦とポロディノ会戦が有名。しかし、本作冒頭に登場する唐vs高句麗の大会戦の名前は？それは調べてもわからなかったが、西暦644年に唐が高句麗に出兵したこと、そして、唐が660年に百済を滅ぼし、668年には高句麗を滅ぼしたことは歴史上の事実だ。本作の鑑賞については、そんな歴史的事実の検証をしっかりとっておきたい。

■□■ 主役は安市城！なぜ安市城だけ独自路線を？ ■□■

冒頭の大会戦は、当初こそ先陣を切った一団の学徒兵の奮闘によって唐軍と互角にわたりあっていたが、唐の騎馬隊の逆襲を受けて包み込まれると、高句麗軍の劣勢は明らかに。あっという間に高句麗軍は総崩れとなり、這這の体で逃走せざるをえなくなったが、実は本作の主役は高句麗ではなく、高句麗の首都平壤のすぐ近くにある小さな安市城だ。そして先陣を切る騎馬隊の一員として奮闘していた学徒兵のサムル（ナム・ジュヒョク）が、以降本作の「語り部」の役割を果たすので、それに注目。

しかし、あの当時ホントにこんな大学生の部隊があったの？ また、冒頭の激突で唐に敗れた高句麗王は、安市城の城主・楊萬春がダンマリを決め込んでこの戦いに参加しなかったことを責め、命からがら敗戦の報告に戻ってきたサムルに対して楊萬春の暗殺を命じたが、それって少しヘンでは？ そうでなくても、太宗率いる唐の大軍を前にして、高句麗全体の団結が必要なのに、安市城主・楊萬春の暗殺などという内部抗争にかまけていいの？ さらに、安市城に至る城が次々と太宗に降伏しているうえ、安市城が太宗の手に落ちれば、高句麗の首都・平壤もすぐにアウトになるのはミエミエなのに……。『天命の城』では清の大軍を前にして、朝鮮王の仁祖は死を覚悟しての決戦か、それとも恥辱に耐えて民を守るための降伏かの決断に苦渋していたが、本作に見る高句麗王はいかにも単純なものだ。

しかして、本作の歴史的な真相は？ それがよくわからないのが少し不満だが、本作はエンタメ大作としてメチャ面白そうだから、その後の展開に期待！

■□■ 5000人 vs 20万人！しかし、城と団結心があれば！ ■□■

今はアメリカ合衆国の一部となっているテキサス州の、メキシコからの独立を巡って起きた「アラモ砦の悲劇」は1836年春のこと。そこでは、わずか200人足らずの男たちがアラモ砦にたてこもって、サンタ・アナ將軍率いるメキシコ正規軍と13日間にわたって戦い、全員壮絶な最期を遂げた。それは多勢に無勢の上、スクリーン上でみたように、アラモ砦は大阪城のような強固な城ではなく、ちっぽけな砦にすぎなかったから仕方ない。「城の攻防戦」をハイライトとする戦争映画はたくさんある。ヨーロッパでは『タイムライン』（03年）（『シネマ4』79頁）や『キングダム・オブ・ヘブン』（05年）（『シネマ7』34頁）がその代表だし、中国では古くは『項羽と劉邦—その愛と興亡 完全版』（94年）（『シネマ5』140頁）や、近時の『グレートウォール』（16年）（『シネマ40』52頁）がその代表だ。

アラモ砦と違って安市城は石で固められた立派な城だが、その中で生活している市民を守る将兵の数は5000人。それに対して、太宗率いる唐軍は20万人だから、いくら城が堅固でも20万の大軍が投石器や梯子等の大道具を使って安市城を一気に攻めたてれば

その陥落は間違いなし。太宗はそう考えていたが、副官のチュ・スジ（ペ・ソンウ）、斧部隊のリーダー、ファルボ（オ・デファン）、そして妹で百発百中のスノギ部隊のリーダー、ベクハ（ソリョン）らと共に、大平原を覆い尽くす20万人の唐軍を見つめるマンチュンは、強固な城さえあれば、そして将兵や市民の団結心さえあれば、対抗することは可能。そう確信していた。また、城内の市民は心から城主マンチュンを信頼し、自分たちの運命を一任していたから、5000人の将兵の心は1つとなり、市民を含む全員の団結心は固まっていた。さあ、そんな安市城の戦いの第1ラウンドは？

■□■第1ラウンドは圧勝！第2Rも勝利！しかし第3Rは？■□■

2019年のNHK大河ドラマ『いだてん〜東京オリムピック噺〜』は面白くないため私は途中で鑑賞を放棄したが、2016年の『真田丸』は面白かった。そのハイライトは1614年の大坂冬の陣における真田幸村が築いた真田丸での徳川の大量軍を迎え撃つ攻防戦だった。また、産経新聞は再三楠木正成の功績を紹介しているが、彼の従来の常識を打ち破った赤坂城と千早城での戦いはメチャ面白い。それらと対比しても、本作中盤のスクリーン上にみる安市城の攻防戦は手に汗握る迫力いっぱいのスペクタクルなものだから、それに注目！

第1ラウンドを兵士と大道具の物量作戦で圧倒しようとした唐軍は、マンチュンの巧みな戦術の前にあえなく敗退。そこで第2ラウンドでは巨大な攻城塔を準備して安市城に向かってきたから、こりゃヤバイ。だって、城壁と同じ高さの攻城塔をゴロゴロと引っ張って城壁に横付けされ、そこから唐軍が次々と進入してくれば、多勢に無勢になるに決まっている。しかし、そこで弓の名手でもあるヤン・マンチュンが考えかつ実行した対抗策は・・・？

城攻めしてくる大量軍に対して油や火で対抗するのは楠木正成も同じだったが、マンチュンのそれは徹底したものだから、その鮮やかさはあなた自身の目でしっかりと。しかして、第1ラウンドの圧勝に続いて、第2ラウンドも勝利すると、さすがの唐軍も城から少し退いて持久戦模様になったが、これはひょっとして兵糧攻め？いやいや、唐軍の目的は首都平壤の攻略と高句麗の征服だから安市城の攻防に手間取る暇はないはず。そう思っていたが、そこで始まったのが突貫工事による土を固めた城の築造だったから、マンチュンたちはビックリ！さすが、万里の長城を築いた国だと感心していた（？）が、その完成が迫ってくると、安市城内は不安と絶望の色に染まっていくことに。そこで、サムルが出した意見は、高句麗の王への援軍の要請だ。その使者として高句麗王から暗殺の命を受けた自分が命を賭していくと申し出たが、さあヤン・マンチュンの決断は？もしサムルが唐軍の囲みを抜けて高句麗王の元に到着し援軍を要請しても、暗殺の命令を果たせないまま、逆に援軍の要請のために戻ってきたサムルを高句麗王は許してくれるの？ひょっとして、サムルはその場で切られてしまうかも？そんな不安を持ちつつ、サムルは高句麗王の元に向かっ

たが・・・。

他方、すでに唐の土木工事は明日にも完成しそうだ。これが完成し、城壁よりも高い土の山から唐軍が城内に入り込んでくれば、それを防ぎとめるのは不可能。そんな中、マンチュンが市民からの提案を受けて採用したのは、ハリウッド映画『大脱走』（63年）と同じような「トンネル掘り作戦」だが、さあ、それは一体ナニ？その成否は？そして、最終ラウンドにおける唐v安市城の戦いの帰趨は？

■太宗は「2度と高句麗を攻めるな」の遺言を残すことに■

本作は「歴史アクション」大作だが、『グレートウォール』に禁軍・鶴軍の女性司令官の美女が登場したのと同じように、マンチュンの妹バクハが、一方では副官チュ・スジとの恋模様を演じつつ、他方では弓矢を持った凛々しい姿で登場し、戦場でも大活躍するから、それにも注目！そんな美女は、多少演技が下手でも弓矢の扱いがごちなくとも許せるが、許せないのは未来を見る神女シミ（チョン・ウンチェ）の裏切りだ。あの時代にそんな神女がいたのは仕方ないが、その“お告げ”とやらはどこまで信用できるの？そんな高句麗の神女を自分の手元において高句麗に向けてさまざまな情報を逆発信させた太宗の手腕はお見事。しかし、わが命を賭したサムルの懸命の説得を受けた高句麗王の援軍の決断は？そして何よりも、土の山から安市城への総攻撃を仕掛けたところで高句麗の市民たちが命懸けで掘った地下トンネルを爆破させると、土の山は・・・？さらに、渾身の力を振り絞った大弓の矢がマンチュンの右手から太宗に向けて放たれると・・・？

13世紀はじめに広大なモンゴル帝国を打ち立てたチンギス・ハンの子孫で、元の初代皇帝となったフビライ・ハンは1274年の文永の役と1281年の弘安の役の2度にわたって日本征服を企てたが、2度とも神風（台風）の襲来によって敗退。以降、2度と日本に侵攻しようとしなかったが、20万の兵をもって高句麗の征服を目論んだ太宗は、安市城の敗北によって唐に撤退し、「2度と高句麗を攻めるな」との遺言を残すことになったらしい。もっとも、ナポレオンは1812年のロシア遠征に敗北したことによってそれまでの栄光を失い、以降衰退の道を転がり落ちて行ったが、安市城での敗北以降も唐自体は繁栄を続けたから、ナポレオンに比べればずっとまし。

しかして、安市城の戦いが残した“歴史上の教訓”とは？そんなことも考えながら、今日の日中韓のさまざまな外交問題をしっかり考えたい。

2019（令和元）年7月19日記